

ちいさな証

試練の中で見つけたもの

トムセン・カレン

スイス日本語福音キリスト教会会員



私は、デンマーク人の父と日本人を母に、5人兄弟姉妹の長女として日本に生まれました。1歳で米国に移住して、6歳で日本に帰り、8歳で再び米国に引っ越ししました。そして、米国で小学校卒業後、12歳で私はスイスに came。言葉も場所も新しかったので、中学に入るとともに全てが新しく一から始まる気持ちでした。ただ変わりがなかったのは家族と自分の信仰生活でした。クリス

チャンホームの中で育てられたので、神様と聖書の話のことは知っていましたが、別に深く考えてはいませんでした。ただ周りの流れに乗って託した信仰でした。

スイスでの最初の一年半は言葉の苦勞がありましたけど、同じ仲間が周りにいたので学びながら楽しく過ごせました。その後、スイス内の違う場所に引っ越した後に生活が難しくなりました。引っ越し先の村での学校は中2から入ったせいとクラスメイト達はもうお互いのことを幼稚園の頃から知っていることもあり、クラスにはすでにグループが出来ていて、クラスにはよく馴染めませんでした。

居心地が悪いと感じる場所では、自分の性格も静かな方なので、より自分の存在を自分で消しちゃう癖は、その状況をよくはしませんでした。みんながお互いとスイスドイツ語で会話をするのも、ついていけないので問題でもありました。学校に行くのが嫌でしたが、通い続けてはいました。前のクラスがあんなにも良かったから今のクラスが逆になったのかとか、なぜあんなにいい経験をしているのに私はこんなに苦しまないといけないのかと、疑問に思う毎日でした。自分の祈りも聞かれているのかも分からなくなったりもしました



この中学時代の間での支えは、通っていたインターナショナルの教会でした。そこではみんなで英語を話せて、良い友達もでき、毎週の楽しみにもなっていたことで一週間一週間耐えられていました。ティーンズグループにも途中参加で入ったのに学校とは違って、あっさりと友達が出来ました。その経験で気づけたことは、同じイエス様を信じている人同士、どの国に行っても家族がいる感じだということです。その発見がより良い支えともなりました。その後ウスターにあった日本語教会JEGにも通うようになり、聖書の学び会にも参加したりする事で、人との繋がりが広がりました。最後の中学の一年間、クラスメイトともちょっとは混じわることができるようになったことで無事終えられ、その後通った学校では良い交わりも持てました。

私が苦しかった時に見つけた信仰の大切さは、今でも支えとなっています。より深く聖書を学ぶ中で知った試練の意味、私たちをどん底に落とすためではなく、育ち強くするためだと聞いて納得できます。
(そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。ローマ書5:3-5)

もし、あのまま良い学校に通い苦しみがなかったら、自分に与えられた人や物の大切さに気づかないまま生きていたと思います。それを教えてくださった神様に今でも感謝しています。今では嫌な状況になる時には、このことから何が学べるのか、何ができるのかと考えるようにもなりました。



苦楽を分かち合える教会の仲間たち

